

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02887

研究課題名(和文) モンゴルにおける境界と越境の歴史

研究課題名(英文) History of borders and border crossings in Mongolia

研究代表者

二木 博史 (Futaki, Hiroshi)

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：90219072

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：中国・内モンゴル自治区・フルンボイル市とモンゴル・ドルノド県に居住するバルガ人、中国・新疆ウイグル自治区とモンゴル・ホブド県に分布するアルタイ・オリアンハイ人の20世紀の越境を事例に、清帝国崩壊後、モンゴル、中国という国民国家が成立するなかで、両国家の境界に居住するこれらのエスニシティが、過去の記憶をたもちつつも、あらたなアイデンティティを獲得するプロセスを文献調査とフィールドワークによってあきらかにし、モンゴル世界のエスニシティの重層性をしめした。

研究成果の概要(英文)：In this study, borders and border crossings of two ethnicities, the Bargas and the Altai Uriankhais, of Mongolia in the twentieth century have been analyzed, based on archival sources and oral histories. The Bargas live in Kholonbuyir City of Inner Mongolia, China and Dornod Prefecture in Mongolia. The Altai Uriankhais are distributed in Khovd Prefecture in Mongolia and Xinjiang Uyghur Autonomous Region, China. After the collapse of the Qing dynasty, some members of these ethnicities crossed the border between Mongolia and China. The process of acquiring new identities in these new-born nation-states show multilayered characteristics of ethnicities in Mongolia.

研究分野：モンゴル史

キーワード：モンゴル史 境界 越境 清帝国 バルガ アルタイ・オリアンハイ フルンボイル カザフ

1. 研究開始当初の背景

(1) 中央ユーラシアの歴史研究において、民族移動や境界策定についての一定の研究成果はこれまでもうみだされてきたが、モンゴル系集団にとっての境界そのものの性格をといなおす研究は、ユ・ヒョジョン、ボルジギン・ブレンサイン(2009)をのぞけば、ほとんどなかった。本研究は、モンゴル地域の統治が帝国から国民国家へ転換する過程で、境界とその性格がおおきく変化し、住民の大規模な越境移動を引きおこしていく動態をあきらかにしようとした。

(2) 本研究グループは、これまでモンゴルの古地図のあらたな研究を模索し、モンゴル古地図の作図法、景観認識、境界報告書についての論文、資料をおさめた英文の研究書を21世紀COEプログラムの成果として2005年に刊行し、その後、科学研究費補助金「モンゴルにおける景観認識の歴史 古地図の研究」(2009 - 2012) 同「モンゴルにおける地図作成とガバナンス」(2013 - 2015) を獲得し、おもに清代のモンゴルの手書きの地図のデジタル化、研究につとめてきた。これらのプロジェクトの一環としてウランバートルで2度の地図・地名研究の国際シンポジウムを組織し、各国の研究者をまきこむかたちで、あらたなモンゴル地図研究のわくぐみを提示してきた。

(3) 本研究でバルガ人とアルタイ・オリアンハイ人を事例としてとりあげるのは、前者の越境が1939年のノモンハン事件(ハルハ河戦争)の一因とされてきたこと、後者の1930年における越境が、極左政策下のモンゴル人住民の大規模な中国への「逃亡」の引き金となったからである。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、「境界」と「越境」の視点から、中央ユーラシアの歴史をとらえなおすことにある。とくに、モンゴルのエスニック・グループであるバルガ人とアルタイ・オリアンハイ人の事例をとりあげ、帝国の記憶、国民国家の形成、エスニシティの重層性の問題をあきらかにしようとするものである。清帝国のある種の自治地域たる外モンゴル、内モンゴルの周辺に位置した諸エスニック・グループに対する支配(「境界」の設定)のプロセス、清の崩壊、モンゴル王国の成立、社会主義革命という歴史の推移のなかでの、かれら自身の国境をこえた移動(「越境」)の要因、結果を、モンゴル、中国の研究者とも連携しつつ、一次史料とオーラルヒストリー資料にもとづいて分析し、国家とエスニック・グループの関係についての新たな理論の構築をめざす。

(2) 本研究は、これまでのCOE、科研費、トヨタ財団研究助成の研究であつかった清代の地図の研究の成果をふまえ、地図上にえがかれた「境界」をこえて移動するエスニック・グループの行動(「越境」)に注目し、地

図そのものを相対化すると同時に、これら周縁部に位置するエスニック・グループのダイナミックなうごきが、歴史上の重大な事件の要因になってきた事実を確認し、モンゴル史研究にあらたなアプローチ方法を提供しようとするものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究ではバルガ人とアルタイ・オリアンハイ人を事例に、モンゴルのエスニック・グループの「境界」と「越境」の歴史をあきらかにすることを目的とするが、ここでの「境界」とは、一義的には清朝政府、モンゴル王国政府、モンゴル人民共和国政府が設定した、隣接地域との境界、隣接の国家との境界をさす。この場合、清朝時代には地域と地域の境界だったものが、帝国の崩壊と新国家の成立によって国境に変質した点に注意する必要がある。

(2) 文献資料にもとづいて、バルガ人、アルタイ・オリアンハイ人の歴史的境界を確定し、そのあと各時代の政府が設定した「境界」とのズレをあきらかにする。

(3) フィールドワークによってバルガ人の1910年代、1940年代の越境、アルタイ・オリアンハイ人の1930年代の越境の要因、過程、結果を検証し、さらにこれらのエスニック・グループがどのようなアイデンティティを過去において獲得し、現在それはどのように変化しているのか、どのような場合に顕在化するのかについても考察する。

(4) 本研究では、以下のふたつの仮説を設定したうえで、それを検証するという方法をとる。

帝国の成立と崩壊、国民国家の誕生によって生まれた「境界」とはべつに、過去の記憶にもとづく、それぞれのエスニック・グループ固有の領域がある。

このエスニック・グループの領域は、移動牧畜をおこなうひとびとにとっては、定着農耕をおこなう民族にくらべ、はるかに広大で流動的であり、それがダイナミックな「越境」を可能にした。

4. 研究成果

(1) 研究代表者は、2015年8月に中国・内モンゴル自治区・フルンボイル市のハイラル市、シネ・バルガ左旗、シネ・バルガ右旗、ホーチン・バルガ旗でインタビュー調査を実施し、1945年のバルガ人のモンゴル人民共和国への集団移住の要因、1939年のハルハ河戦争(ノモンハン事件)とバルガ人の境界意識の関係について調査した。1945年の移住の主体になった旧フブト・チャガーン旗については、旗(ホショー)内を鉄道がとおること、ソ連領と接すること、冤罪事件で被害をうけたことが影響しているという証言がえられた。モンゴルとフルンボイルの境界の問題については、公的な境界と現地のバルガ人の境界解釈がおおきくことなる点が、現地調査を

とおしてあきらかになった。ハルハ河を国境とみなすバルガ人の解釈は日本がわ(関東軍)の解釈と一致しており、ハルハ河の右岸に国境がひかれているというモンゴルがわの解釈とはあきらかにことなるバルガ人の伝承・言説が、日本がわのおもわくとは別個に確実に存在していたことが確認できた。ハルハ河戦争の結果確定した満洲国とモンゴル人民共和国の国境は、現在は中国とモンゴルの国境にかわっているが、バルガ人の境界意識は、清代とあまりかわらない状態で今日までひきつがれている。

(2)研究分担者は、アルタイ・オリアンハイ人の土地がえがかれた複数の地図の分析によって、19世紀からの国境の変遷、カザフ人の流入の過程を研究した。具体的には、1890年から1928年のあいだに作成され、清、モンゴル国、中華民国の各政府に提出された4枚の地図、および1910、20年代のアルタイ・オリアンハイ7旗の分布とカザフ人の遊牧地の状況をしめした2枚の地図を、関連する史料の記述とあわせて分析し、同治年間からの中口国境条約、新疆におけるムスリムの反乱等が、アルタイ・オリアンハイ人の土地にカザフ人がすみつく過程にどう作用したかをあきらかにした。

(3)モンゴルのバルガ人コミュニティのうち、フルンボイル郡の形成、その要因については、第2次世界大戦の終結、日本の敗戦、内外モンゴル統一運動との関連で比較的良好に知られているが、もうひとつのゴルバンザガル郡については、ほとんど注目されてこなかった。研究代表者は、2016年8月にゴルバンザガル郡で調査を実施し、1911年のモンゴル独立革命にフルンボイルから参加した代表的人物マンライバートル・ダムディンズレンにあたえられた領地に起源を有するゴルバンザガル郡の形成と直接関係があるのは、1916年のバルガ人の移住だということを確認することができた。

(4)研究分担者は、2016年9月に中国新疆ウイグル自治区の清河(Qinghe)市で調査をおこない、1930年代にアルタイ・オリアンハイ人が新疆とモンゴル国にわかれて居住するようになった状況、カザフ人との共生関係を考察した。

(5)2017年8月にウランバートルで、国際モンゴル学会その他機関と本科研の共催でモンゴルの地図・地名の研究の国際会議を組織した。この会議で研究代表者は「日本の参謀本部が発行した外モンゴル地域の軍用地図」という研究発表をおこない、モンゴルにおける境界に対する日本軍の関心について分析した。同会議で研究分担者は「アイマフ、ホシヨウの地図の作成にかかわる清朝の命令、規定とモンゴル人の参加」という発表をおこない、同治3年(1864年)に清朝総理衙門からだされた盟と旗の測量地図を作成する命令に対し、モンゴル人がどのように反応し地図が作成されたかについてあきらかにし

た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10件)

二木博史「モンゴル地域をえがいた外邦図外モンゴルを中心に」『モンゴルと東北アジア研究』3号, 2018年, 31-46. 査読なし.

上村明「20世紀前半のモンゴルの宣伝ポスターにおける日本イメージ」『モンゴルと東北アジア研究』3号, 2018年, 81-92. 査読なし.

二木博史「トゥブ県パトスンベル郡での調査 外邦図の検証とイフプレー所在地の確認」『日本とモンゴル』135号, 2017年, 66-76. 査読なし.

上村明「適応する「主体」 モンゴル国牧畜民の世帯構成から」『文化人類学』82-1, 2017年, 14-34. 査読あり.

Kamimura Akira, “Mongoliin khoshuu nutgiin zurgiin khuvisal, dursleliin oorchlolt,” *Mongol sudlal ba togtvortoi khogjil*, No. 2, 2017, 61-67. 査読なし.

二木博史「清末におけるモンゴル人の交易 光緒17年(1891年)のザサグト・ハン旗からフフホトへの隊商派遣を中心に」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』23号, 2017年, 1-11. 査読なし.

二木博史「ドルノド県調査報告」『日本とモンゴル』133号, 2016年, 19-31. 査読なし.

上村明「牧畜における移動 不確実性を生きる」『Synodos』216号, 2016年, 46-54. 査読なし.

二木博史「フルンボイル調査報告」『日本とモンゴル』132号, 2015年, 107-115. 査読なし.

Kamimura Akira, “Altain uriankhaichuud ekh ornoos durvesen uu, ekh nutagtaa butssan uu? --- 1930 ond Altain urainkhaichuud Altai davsan ni,” *Bibliotheca Oiratca*, No. 51, 2015, 98-110. 査読なし.

[学会発表](計 13件)

上村明「エスニック境界を越える牧畜民の協力 モンゴル国西部におけるその歴史・制度・生態」生態人類学会第23回研究大会, 2018年.

Futaki Hiroshi, “Yaponii janjin shtabiin khevluulsen Ar Mongoliin tsergiin zoriulaltai gazriin zurag,” *International symposium: Mongolian maps and toponymy (Ulaanbaatar)*, 2017.

Futaki Hiroshi, “On the military maps of Inner Mongolia published by the Imperial Japanese Army General Staff Office,” 中国

人民大学古地図学術研討会(北京)2017年。
Futaki Hiroshi, “Military map making and Japanese geopolitical interest in Mongolia in the first half of the twentieth century,” 第10回ウランバートル国際シンポジウム, 2017年。

Futaki Hiroshi, “Manj Chin ulsiin khoshuunii tamgiin gazraas olgoj baisan zam yavakh temdegt bichguudiin tukhai,” The 2nd MUC International Symposium on Classical Mongolian Texts (Peking), 2017.

Kamimura Akira, “Aimag, khoshuunii nutgiin zurag uildekh Chin ulsiin zarlig, durem ba mongolchuudiin oroltsoo,” Mongolian Maps and Toponymy (Ulaanbaatar), 2017.

Kamimura Akira, “Visual images of the Japanese in Mongolia (First half of the 20th century),” 第10回ウランバートル国際シンポジウム, 2017年。

Futaki Hiroshi, “Contradictions between official documents’ descriptions and local pastoralists’ interpretation of the borders in the cases of Khalkha and Kholonbuyir,” The 11th International Congress of Mongolists (Ulaanbaatar), 2016.

Futaki Hiroshi, “Mongol trade at the end of the Qing era: Sending a caravan from the Zasagt Khan Banner to Koke Qota in 1891,” “Torgonii zam ba Tsainii zam” sedevt 9 dekh udaagiin Yapon-Mongol Ulaanbaatarin Olon Ulsiin Simposium, 2016.

Kamimura Akira, “Mongoliin khoshuu nutgiin zurgiiin khuvisal, dursleliin oorchlolt,” The 11th International Congress of Mongolists (Ulaanbaatar), 2016.

Futaki Hiroshi, “Khuuchin gazriin zuragt tусgagdsan Khalk Kholonbuiiriin khiliin budlian,” The Third International Conference on Tungus Languages and Tungus Culture (Khailar), 2015.

Kamimura Akira, “‘Altain uiankhaig zakhiragch Baruun gariin bugdiin darga Baldandorjiin bichig’iin tukhai,” Olon ulsiinerdem shinjilgeenii khural: Mongol survalj bichig sudlal (Ulaanbaatar), 2015.

上村明「アルタイ・オリアンハイはなぜアルタイを超えたのか? 1930年の「集団逃亡」について」,内陸アジア史学会, 2015年。

〔図書〕(計 2件)

ボルジギン・フスレ編, 二木博史ほか『日本人のモンゴル抑留とその背景』三元社, 2017年, 35-49.

S.Chuluun, E.Ravdan, H.Futaki, A.Kamimura, *Mongoliin gazriin zurag, gazriin ner sudlal*, Admon, 2015, 264.

(1)研究代表者

二木 博史 (Futaki Hiroshi)
東京外国語大学・その他部局等・名誉教授
研究者番号: 90219072

(2)研究分担者

上村 明 (Kamimura Akira)
東京外国語大学・外国語学部・研究員
研究者番号: 90376830

(4)研究協力者

S. Чоолоон (S.Chuluun)
モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所長

L. Арлтанзаяа (L.Altanzayaa)
モンゴル教育大学教授
玉海 (Yuhai)
中国・内モンゴル大学講師